

格助詞ヲ・ニの表すもの

＝「ヲ格型構文」に見られるヲ→ニ原則＝

小池 清治・田邊 知成

0. はじめに

膠着言語である日本語では、文の各成分に特定の語尾が加わることでその成分の文中での文法的役割が決まってくる。とりわけ名詞句の後ろについてその名詞句の文法的役割を決定する役目を担っているのが格助詞である。

一般に、日本語のガ格は主格を表すマークであるとされ、ヲ格は他動詞文の対格を表すマークであるとされている。しかし、日本語の場合、ヲ格を伴った自動詞文や、対格と考えてもよいようなガ格が存在するなど、ガ格が主格、ヲ格が対格とは簡単に記述できない問題を含んでいる。後者である「対格と考えてもよいようなガ格」について一般に言われているのは、いわゆる「～ハ～ガ構文」であるが、この構文は動詞文のみならず形容詞文にも名詞文にも出現する。また、助動詞「(V) タイ」を伴った願望文や可能態もこの形式をとる。一方、ヲ格のほう是一部の自動詞文以外に使役構文にも出現する。また、対象を複数必要とする文となればヲ格に加えてニ格も出現する。これら動詞文以外の文も含めて「自・他」なるものを突き詰めていけば、「ガ格型構文」と「ヲ格型構文」という左右のベクトルを持つ日本語構文の体系が見えてくる。

いったいガ格とは何を表すものなのか、ヲ格とは、またニ格とは何なのか。

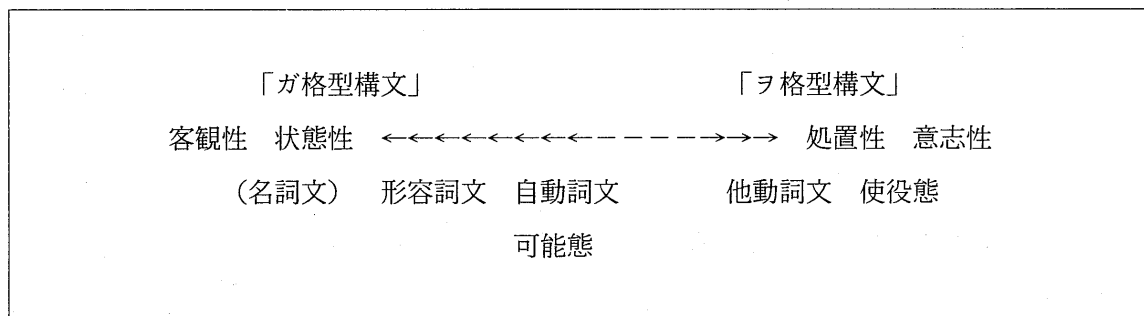
本研究は、このうち「ヲ格型構文」に現れるヲ格とニ格に焦点を当て、日本語の格助詞ヲとニの表すものの本質を探ろうとするものである。

本論に入る前に、「ガ格型構文」と「ヲ格型構文」という視点を簡単にまとめ、整理しておく。

0.1. 「ガ格型構文」と「ヲ格型構文」

日本語の構文を注意深く観察すると、動詞の自・他を中心として、大きく「ガ格型構文」と「ヲ格型構文」とに分けられる。それぞれをごく簡単に述べれば、ヲ格の側には「他動性」が、ガ格の側には「自動性」があるということになるのだが、「ヲ格型構文」には一般の他動詞文に加えて使役構文も含まれ、「ガ格型構文」には、可能構文や形容詞文、名詞文が含まれる。それらを踏まえて言えば、「ヲ格型構文」のキーワードは「処置性」であり、「ガ格型構文」のキーワードは「状態性」であると言えそうである。また、それぞれ「処置性」「状態性」には程度の度合いがあり、それを左右のベクトルに分けて表示すると次の図1のようになる。

図1



0.2. 状態性とはどういうことか

- (1) 夏は暑い。
 (2) ?人が多い。→ここは人が多い。

状態を表すもっとも典型的なものとして、まずは形状形容詞群を挙げておく。それらは主格で表されるものの形状や性質を表している。多くの場合客観性を持ち、動作性を持たない。ここではこの主格で表されるものを状態主と呼ぶこととするが、有題文の場合、状態主と文の主題が一致するときは「状態主ハ＋述語」で示され(例1)、異なる場合は「主題ハ＋状態主ガ＋述語」の形態をとる(例2)。

- (3) あ、あった、あった。
 (4) 今やっとわかったよ。

存在を表す動詞や状態動詞(それが可能であるという状態を表す可能形も含む)も基本的にはこの形状形容詞と同様の性質を持つ。ただ、動詞であるがゆえに動作性を含む表現が可能となることもある(例3・4)。

- (5) 一人暮らしはさびしい。
 (6) わたしは彼の成功がうれしい。

次に、感情形容詞群であるが、このグループはヒトの心の状態を表しているため、先の形状形容詞とは異なり、ヒトの主観が入り込む余地が大きい。また、その感情をもたらしたものを表明する必要がある場合、ガ格を採用するが、このガ格が主格であるのか対格であるのかがよく議論の対象となる(例6)。しかし、採用格は形状形容詞の場合と同様、「～ハ＋述語」または「～ハ～ガ＋述語」となる。また、動作性がなく静的な表現である点も形状形容詞と同じであり、状態性の述語群であることに間違いはない。(6)で示される主題の「わたし」はいわゆる大主語であり、感情主である。願望を表す「動詞＋たい」の形式もこのグループと同様の性質を有する。

- (7) 温度が下がる。
 (8) わたしは服が汚れた。

ここでは「状態性」を「処置性」と対比して捉えることとし、それは広く状態の変化をも含むものとする。したがって、ル形(辞書形)で静的な状態を表しうるもののみが「状態性」を表すとは規定しない。自動詞群は状態を表すもの、状態の変化を表すもの、ヒトやモノの移動を表すものの3つに筆者は大別するが、少なくとも前2者は広義において状態性の述語であると考ええる。そこに共通するのは客観性であり、採用格は形容詞群と同様、「～ハ＋述語」(例7)、「～ハ～ガ＋述語」(例8)の形態をとる。

- (9) 上を向いて歩こう。
 (10) ボールが球場の外に出た。

ただし、変化動詞であっても、ヒトが主語となる場合は主観的意志的行為も可能であり、一般に自動詞が拒絶すべきヲ格と組み合わせることもある(例9)。移動動詞群はヒトの行為として主観的意志的な表現になりやすいが、より広義に見れば動作主の場所空間的な状態変化であり、モノを動作主とした客観的な場所空間移動も表しうる(例10)。

このように、本稿で言うところの「状態性」とはすなわち「一行為性」と言えるもので、「～ハ＋述語」または「～ハ～ガ＋述語」の形態をとる。

0.3. 処置性とはどういうことか

- (11) わたしは太郎を殴った。
 (12) 銀行で円をドルに変える。

「処置性」を表すもっとも典型的なものとして、対象に物理的な力を加える他動詞群を挙げておく(例11)。前項で挙げた状態性の述語群が形状形容詞・感情形容詞・状態動詞・変化動詞・客観的な場所空間移動動詞とするならば、他動詞とは形状・感情・その他諸々の状態などの「他者」を変化せしむる動詞群である。原則的に「他者」である動作の対象に対してヲ格を取り、変化の起点・着点を明示したい場合には「～ヲ～ニ＋述語」の形態をとる(例12)。通常、動作の対象は動作主のコントロールの下に置かれるため、この処置性を「支配」と呼んでもよい。

- (13) わたしは毎朝、新聞を見る。

この「処置性」に関して、対象の変化が物理的に目に見えるものもあれば、(13) のようにはっきりとは変化が見えないものもある。しかし (13) のような場合にも、「見る」という動作に関する限り、「新聞」は「わたし」の支配下にあり、動作主である「わたし」には新聞を情報として処理しようという意図がある。このように対象に対して何らかの意図を持ってその対象に関わろうとする場合、動作には処置性が生まれる。

(14) 風で柳の葉が揺れる。

(15) 風が柳の葉を揺らす。

つまり、他動詞で表される動作は、対象を支配しようという意図するものであり、その動作主は有情物で、かつ、その他動的動作はある意図を持って意志的におこなわれる「行為」であることが多い。しかし、動作主が無情物である (15) のような他動詞文でも、話者（表現者）は「風」というものを「柳の葉」に対する変化の与え手として認識しているのであり、この場合の「風」は「柳の葉」に対して処置性を有していると言える。

(16) 宿題を忘れた生徒たちを立たせる。

(17) 今日の午後は生徒たちに自由に遊ばせた。

先に他動的動作を「他者を変化せしむる」と定義したが、「せしむる」ということを一步進めて考えるならば、使役文も処置性を有することになる。一般的に使役文とは「他者」にその行為をおこなわせるため、元の行為が自動的動作であっても、その使役文は他動的なものとなり、ヲ格を採用することが可能となる（例16）。ただ、被役主の自発的な行為である場合、それに対しての使役主の許可といったニュアンスを持たせる場合は (17) のように「被役主＋使役動詞」という形態をとり、ヲ格を採用する (16) に比べ、使役主の持つ支配性・処置性はぐっと弱まる。ということは、他動的動作（使役文を含む）の処置対象はヲ格でマークされるものであると言えそうである。本稿では日本語の他動詞文には処置性があり、その対象はヲ格でマークされると仮定する。そして

その処置性は動作主が何らかの意図を持って他者である動作対象に関わろうとする場合に発生するものであると仮定する。

1. ヲ格型構文に見られる「ヲ→ニ原則」

1.1. ヲ→ニ原則

形容詞が動詞ともっとも異なる点は、単独で「変化」を表すことができない点である。逆に動詞というものは原則的に「動作」を表すものであり¹、その「動作」とは始まりと終わりといったアスペクトを持ち、その前後に何らかの「変化」を持つものである。そしてその「変化」するものが動作主自身であることを表すものが自動詞、動作主が「変化」の仕手であり、「変化」するのは動作主以外の他者であることを表すのが他動詞だということができる。その場合、自動詞文は動作主としてのガ格²を要求するのに対して、他動詞文では他者としてのヲ格をも要求する。さらにはその表す意味内容からもうひとつの他者としてニ格を要求する他動詞文もある。

本稿はこれらのうち、特にヲ・ニ格のはたらきについて何らかの意味づけをおこなうことを目標としているが、筆者はこれらを次のように考えている。

(18) 銀行で円をドルに換える。

¥ → \$

(19) おたまじゃくしがカエルになる。

おたまじゃくし → カエル

基本的に動詞が表す「変化」について、変化の前に意識される対象をヲ格が受け持ち、変化の後に意識される対象をニ格で表す。これを仮に「ヲ→ニ原則」と呼んでおこう。他動詞文である (18) では動作主が省略されているが、動作主にとって他者である円とドルについて、変化の前に意識される円がヲ格をとり、変化の後に意識されるドルがニ格で表されている。日本語話者であればここでおこなわれた変化が [¥→\$] であり、その逆 [\$→¥] ではないということは容易に理解できる。たとえ「ドルに円を換える」という具合に語順が入れ替わったとしてもその理解が逆転することは

¹ その意味で「ある」「いる」を存在詞として動詞と区別する考え方もある。

² 有題文で、文の主題と動作主が重なる場合、動作主が格は主題へのものと隠れる。

ない。これは日本語のヲ格とニ格が「変化」に対してそれぞれ意味の持ち分けをおこなっているからだと考えられる。そして自動詞文である(19)の場合、変化するものは動作主自身である「おたまじゃくし」であるので変化の結果であるニ格のみが要求されていると考えられるのである。

1.2. 動作の結果を表すヲ格

しかし前項で挙げたヲ→ニ原則が絶対であるかという、たとえば「お湯を沸かす」や「ビルを建てる」などはどうなるのかという疑問が当然起きてくる。ここではヲ→ニ原則に反するヲ格について考えてみる。

(20) お湯を沸かす。

(21) ためておいた水を沸かす。

(20) は変化の結果現れる「お湯」というものに対してヲ格がとられている。これは変化の前後を持ち分けするヲ→ニ原則に反する。しかしヲ→ニ原則に合致する変化前の「水」がヲ格を採用している(21)もまた正しい日本語である。水という物質が「沸いた」場合、お湯以外のものには変化し得ないわけで、通常われわれはこの両者をともに述べることをしないが、もし厳密に言うとするならば「水ヲお湯ニ沸かす」としか表現しようがない。その逆は意味的にありえないのである。したがって、「沸かす」という動詞もヲ→ニ原則を逸脱するものではないということが言えるが、変化後に現れる「お湯」に対して(20)のように表現することができるということは非常に興味深い。

「お湯を沸かす」と同様ヲ格が変化の結果など多様なものにつくことの例としてよく挙げられるものに、「(豆/臼/粉)を挽く」がある。「水ヲお湯ニ沸かす」のような厳密な表現型をとれば、「挽く」の場合は「臼デ豆ヲ粉ニ挽く」ということになる。

図2に示した通り、この動作の目的を「豆→粉」の変化を実施することだとすれば、「豆」は変化前の対象であり、「粉」は変化後の対象、「臼」は変化を実施する手段として利用される道具ということになるが、この3者の関係においてそれぞれデ・ヲ・ニ格を入れ替えることはできない。

(22) 臼で粉ヲ挽く。(参与者: 粉+臼)

(23) *豆を(に/で)粉ヲ挽く。

(参与者: 粉+豆)

(24) *臼ヲ豆を(に/で)挽く。

(参与者: 臼+豆)

(25) *臼ヲ粉に挽く。(参与者: 臼+粉)

(22) (23) に見られるように、「粉ヲ挽く」と言えるのは変化前の「豆」を表現しない場合に限られる。さらには(24) (25) に見られるように、道具としての「臼」にヲ格を採用した「臼ヲ挽く」と言えるのは変化前の「豆」も変化後の「粉」もどちらも表現しない場合に限られるのである。結果的に二重ヲ格を発生させてしまう(23) (24) は論外としても、ヲ格の重複のない(25)までが非文となることは注目に値する。日本語話者の理解として、(25)のように発話された場合、「臼」が結果として「粉」に変化したと理解するほかない。また、(22)が正文となるのは変化前の対象である「豆」が表現されていないためであり、道具を表すデ格と変化後の「粉ヲ」は対立しないことを示している。このことは結局「挽く」という動作が先のヲ→ニ原則を逸脱するものではないことを示していると言える。

つまり、厳密に3者が出揃った表現型を採用すれば、ヲ格で表現できるのは変化前の「豆」のみであり、逆に厳密ではない、あるいは変化の前後を明示する必要のないおおざっぱな表現の場合に限り「臼ヲ」や「粉ヲ」が許されるのである。さらに次の例も見てみよう。

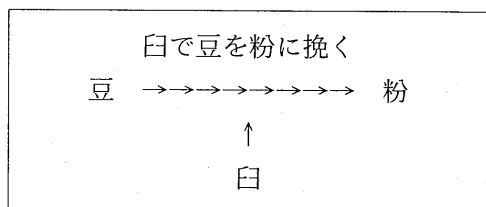
(26) *これは昨日わたしが挽いた豆だ。

(×豆→○粉)

(27) *これは今からわたしが挽く粉だ。

(×粉→○豆)

図2



「挽く」の場合、「豆」「粉」「臼」の3者を厳密に表現しない場合は「豆ヲ」「粉ヲ」「臼ヲ」のすべての表現型が可能であるが、(26) (27) に見られるように、動作のアスペクトによっても表現型の規制を受ける。いずれも連体修飾のかたちをとっているが、(26) では「挽く」という行為がすでに完了しており、(27) では挽くという行為を今から開始することを示している。その場合、動詞「挽く」の対象となるものは(26) では変化が完了した後に現れる「粉」でなければならない、(27) では変化前の物質「豆」でなければならない。ちなみに、「臼」の場合は動作のアスペクトに関係なく、(26) でも(27) でも表現可能である。このことから、たとえ「豆を挽く」「粉を挽く」、どちらの表現型も可能であったとしても、この両者に現れる「挽く」は同義ではなく、そこにはヲ→ニ原則が内包されていると考えられる。

以上のことから、ヲ格、ニ格を理解する「前提としてのヲ→ニ原則」は否定されるものではないということが言えそうだが、変化の前後を明示する必要のない場合、どうしてヲ格はさまざまな対象（動作の道具や結果など）を取り込んでしまうのだろうか。その辺から「ヲとはいったい何ぞや」という疑問を解く鍵が見えてきそうである。

1.3. 結果のヲ格は意味的拡張か？

次の例も「挽く」と同様、「結果」を表すヲ格をとる例である。

(28) 絵を描く。

(29) 見たままの光景を絵に描いてみる。

「絵を描く」も厳密に言えば頭のなかにイメージしたもの（変化前の対象）を絵というかたち（変化後の対象）に仕上げる行為であり、「挽く」と同様の理解が可能である。しかし、(28) の「絵を描く」は（先の「粉を挽く」も同様であるが）別に変化前の対象を省略した表現というわけではなく、それだけで完結した過不足のない表現である。どうやら、変化の前後を明示した厳密な表現から一部を省略した場合にのみ「結果を表すヲ格」が許されるというより、ヲ格で表される表現を厳密に述べた場合にヲ→ニ原則が現れるというほう

が自然な感じを受ける。すなわちヲという格助詞が意味的拡張によって道具や結果をも表現できるようになるのではなく、ヲはそもそももっと大きな何かを表しているものなのだと考えられる。

1.4. 変化の前後を明示できない動詞（1）

(30) パンを作る。

(31) これは昨日わたしが作ったパンだ。

(32) これは今からわたしが作る X だ。

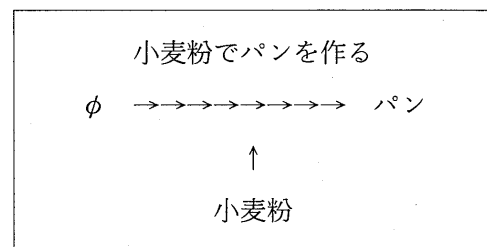
「パンを作る」の「パン」も動作の結果生じるものであるが、(31) (32) は先の(26) (27) で「挽く」に対しておこなったのと同じ操作を「作る」に対して加えてみたものである。「挽く」の場合は(32) の X に当たる部分に変化前の物質である「豆」を埋め込むことができたが、「作る」の場合は適当な単語が見当たらない。

(33) *小麦粉をパンに作る。

(34) 小麦粉でパンを作る。

「パン」の物質的変化を考えた場合、[小麦粉→パン] という変化がひとつ想定できるが、(33) のような表現形式は非文となり、テ格をともなった(34) のような形式をとらねばならない。これは「作る」という動作が変化の前後を明示できない動詞であることによる。

図3



「作る」は「創る」に通じ、「新たに何かを産出する」ことを表す動詞であり、変化の前の対象そのものが存在しない。このような動詞群には変化の結果を表すニ格をとることも許されず、そもそもヲ→ニ原則を適用することが不可能である。したがって、たとえ物質的に見れば「小麦粉→パン」という変

化であっても、(33) のようには表現されず、「小麦粉」は「挽く」の場合の「臼」と同様、その動作を実現する道具（材料）として扱われるのである。

(35) 臼を挽く。

(36) *小麦粉を作る。

(作られたものがパンであるという意味においては*)

(37) *オーブンを作る。(同上)

「挽く」の場合は道具である「臼」をヲ格にとることも可能であったが、(36) (37) のように「作る」は道具に対してヲ格をとることはできない。これは「挽く」が「引く」に通じ、元来臼のような「挽くための道具を扱う」ことを意味する動詞であるためである。「箸ヲ食べる」や「鉛筆ヲ書く」と言えないように、道具をヲ格として採用できる動詞は限られている。「辞書ヲ調べる」と言うことが可能なのは、「辞書」が道具としてだけでなく、内容を持った「調べる対象」としても解釈できるからだと考えられる。また、「聞く」などの場合であれば、音を発するものであれば何でもヲ格としてとれるのであり、テープレコーダー、カセットテープ、ラジオなどは内容を聞くための「道具」としても、ただの「音源」としてもヲ格として「聞く」と結びつくことが可能である。

1.5. 変化の前後を明示できない動詞 (2)

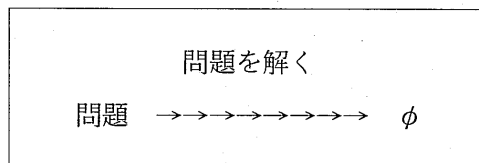
(38) 問題を解く。

(39) ?? 答えを解く。

(40) *問題を答えに解く。

一方、「解く」という動詞は「作る」とは反対に変化の前にあるもののみをヲ格にとり、結果に対してはヲ格としてもニ格としてもとることができない動詞である。このような例を持つ動詞群は結果として対象を消滅させてしまうことを表す動詞群で、仁田義雄 (2002)³ はこれらと組み合わせられる名詞句を「消滅の対象」とよんでいる。この動詞が対象に与える「変化」を図に表すと、次の図4のようになる。

図4



(41) これは昨日わたしが解いた問題だ。

(42) これは昨日わたしが解いた答えだ。

(43) これは昨日わたしがふさいだ穴だ。

「解く」に関して (31) でおこなった操作を当てはめると、(41)「問題」も (42)「答え」もどちらも正文となるが、「解いた」が指しているものは異なる。ペーパーテストのように問題欄と解答欄があった場合、(41) が指すものは問題欄の記述であり、(42) が指すものは解答欄の記述である。「解く」と同じく「消滅の対象」をとる動詞「ふさぐ」の場合、(43) が言えるのは「穴」の痕跡が残っている場合のみである。つまり、「解く」という動作は「問題」を消滅させること、[問題→φ]を表すが、[問題→答え]の変化を表す動詞ではない。

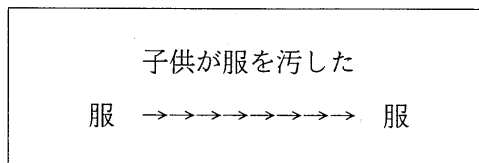
1.6. 変化の前後を明示できない動詞 (3)

(44) 子供が服を汚した。

仁田は先の「作る」のような動詞がとる名詞句を「結果の対象」と呼び、「解く」がとるような「消滅の対象」ともうひとつ、「変化の対象」を挙げている。

このグループは他動詞のヲ格としてはもっとも一般的な対象であるが、作用の開始前と作用後において対象の名称的な変化が起こらないものである。

図5



「汚す」が表す変化は [(汚れていない) 服→(汚れた) 服] の変化であり、対象である「服」

³ 仁田義雄 (2002)『辞書には書かれていないことばの話』岩波書店

自体の名称は汚す前と後では変わらない。「本を読んだ」なども同様で、情報として「処理した」あるいは内容を「理解した」という意味で「〔読んでいない〕本→〔読んだ〕本」という変化を加える動作である。このグループも変化の前後を明示できない動詞であり、「服ニ汚した」「本ニ読んだ」と、ニ格をとることができない。

名詞句の側に着目すれば、先ほどの「挽く」の例では「臼」がこの「変化の対象」ということになる。「変化の対象」をとる作用は、実際に変化が起こる変化部位を対象としてとるのではないので、その「変化」は一様ではない。「服を汚した」のように対象内部で起こる場合もあれば、「本を読んだ」のようにむしろ動作主の側で対象に対する何らかの関わりが変化したと考えられるものもある。

1.7. 抽象動詞と具象動詞

(45) これは今からわたしが作るパン (の写真) だ。

(45) は1.4.で挙げた (32) の X に当たる部分に名詞を入れて文が成立する例である。話し手が聞き手に対してパンの写真を見せ、今からわたしが作ろうとしているのはこの (種類の) パンだと説明している場合である。先ほどの検証で、「作る」は変化の前後を明示できない動詞であると述べたが、(45) に現れる「パン (の写真)」も変化前の対象ではない。この場合でも実際の変化は〔(写真) → (実物)] ではなく、

(46) *パン (の写真) をパンに作る。

と、言い換えることはできない。この「パン (の写真)」は動作主が直接「変化を与えよう」とする対象ではなく、その対象を抽象化したものである。言い換えれば、ここでの動詞「作る」自体がその意味を抽象化させているとも言える。

(47) (パンの写真を見ながら…) 今からこのパンを作りましょう。

(47) の「このパン」は現時点で存在しているものではない。結果としてできるものはどんなパン

かわかったものではないし、もしかしたらパンと呼べたものではないかもしれない。そう考えれば (47) のようにパンの写真を見ながらでなくとも、単に「パンを作る」という文自体が (47) と同様の性質を持っているといえることができる。つまり、表層的にヲ→ニ原則に反するヲ格を持つ動詞は何らかの抽象性を持っているのではないかと考えられるのである。

この観点から「沸かす」のような例を見れば、「水をお湯に沸かす」というような厳格な表現は、「水」という物質の温度による変化を述べた具体的な表現であり、対象に対するひとつの作用を表している。それに対して「お湯を沸かす」は「お湯」という結果目的のみを求めており、「作る」と同様、ひとつの創出を表している。その場合の変化は〔 ϕ →お湯] であり、変化前の物質「水」と共起しない場合にのみ表現可能なヲ格なのである。このことを次のように整理しておく。

(48) 水を沸かす。

変化前ヲ格 [水→お湯]

－ 作用動詞 － 具象動詞

＝「お湯」との共起可能

(49) お湯を沸かす。

変化後ヲ格 [ϕ →お湯]

－ 創出動詞 － 抽象動詞

＝「水」との共起不可

続いて、「挽く」という動詞についても見ておく。

(50) 老婆が臼を挽いている。

原義 (抽象動詞的)

(51) 近づいて見ると、なにやら豆を挽いていた。

具象動詞的用法

(52) 団子にするための粉を挽いているのだという。

抽象動詞的用法

例の (50) (51) (52) はひとつの連続した記述である。まず、話者の目に老婆が臼に対して両手を前後させている姿が映る。(50) では道具としての「臼」のみが記述されている。先述したとおり「挽く」という動詞は「引く」に通じ、奥に存在するものを手前に引き入れる動作、つまり道具で

ある「臼」を扱う動作を表すものでこの動詞の原義に近い。(50)の段階では「臼」の中に豆が入っていないにもかかわらず、空の「臼」であっても動いていけばよいわけで、「臼」を扱うこと自体が目的となった表現である。したがって、その道具の使用に際して参与しうる「豆」や「粉」と共起することができない。それに対して(51)(52)の「挽く」は「臼などを用いて食物を細かくする」という語義を含んでいて、(50)の「挽く」からは語義の拡張が見られる。(51)と(52)の違いは、(51)が目に見える実際の作用に着目した記述であり、(52)がその行為の期待される結果に着目した記述であるという点である。創出動詞としての(52)では「粉ヲ」が変化前の「豆」と共起することは許されない。

2. [→ニ]の自立性

2.1. A級補語ヲ+結果補語ニ

他動詞が、その加える作用の前後を対象として明示できるものである場合、ヲ→ニ原則は有効である。しかし、それ以外のものでは作用の抽象的な目標や期待される結果までもヲ格で表そうとする。前項で「抽象化」という言葉を使ったが、1.2.で述べたようにむしろヲ格とはそのような抽象的なものを含んださまざまな対象を飲み込むものであり、逆に作用を「具象化」させたものがヲ→ニ原則であると考えられる。

(53) 銀行でカネを換えた。 抽象動詞

(54) 銀行で円をドルに換えた。 具象動詞

「換える」にもヲ→ニ原則で表される具象動詞的用法と「カネを」だけで完結できる抽象動詞的用法のふたつがある。(54)のような具象動詞的用法の場合は[¥→\$]の変化となる。

(55) 銀行でカネをドルに換えた。

(56) *銀行で円をカネに換えた。

続いて(55)を見てみよう。ここで起こっている変化は[カネ→\$]ではなく、「カネを換える」という抽象動詞的用法に結果補語としての「ドルに」がくっついているのである。(56)を見ても

明らかなように、その逆は許されず、ヲ格で示された「円」が「カネ(貨幣)」以外のものであるとしか理解できない。それに対して(55)の「ドル」は「カネ(貨幣)」としても理解が可能となっている。仁田の言う「変化する対象」である「カネ」はニ格で現れることができないが、「カネ」がヲ格で表される抽象動詞的用法に具体的な変化の結果である結果補語「ドルに」が付くことは可能なのである。

仁田は「結果の対象」、「消滅の対象」と並べて「変化する対象」と呼んでいるが、要するにある作用の前後において、「名称としては変化しない対象」である。混乱を避けるためにここでは仮に「A級補語」とでも銘打っておく。これは適切な用語が見当たらないため、「A級」に特別な意味はない。仁田は対象内部で変化が起こるものを「変化する対象」と呼んでいるようであるが、ここで筆者がA級補語と呼ぼうとしているものは、内部で変化を起こすものや、逆に「本を読む」のように動作主の側で何らかの関わりが変化するものなど、動詞で表される直接的な変化に対して自立している補語を指すものとする。

ヲ格で表される対象がA級補語である場合、結果補語であるニ格との共起が可能となる。(55)は(53)を詳しく述べたものであり、さらに実際の作用の前後まで詳しく述べた記述が(54)であると言える。ヲ格で表される表現を厳密に述べた場合にヲ→ニ原則が生きてくるのである。

2.2. ヲ→ニ原則の拡張

具象動詞的用法である(54)の「円」と「ドル」はどちらも対等な名詞であるが、(55)に現れる「カネ」と「ドル」は対等な名詞ではない。「カネ」を貨幣だとするならば、「ドル」はその下位項目に当たる。そして(55)から「ドル」を取り払った(53)も文としては完結している。つまり、(55)の「ドルに」は必須格ではなく、(53)を詳しく述べているに過ぎない。ここではニ格が[→ニ]のみを表す結果補語として独立している。

(57) 部屋の温度を18℃に上げる。

(58) 生産量を3000個に増やす。

(57) (58) に現れる数値はいずれも変化の結果生じる数値であるが、これらも必須成分ではない。文自体は「温度を上げる」「生産量を増やす」で完結している。

(59) 小豆を粉状に挽く。

(59) は1.2.で見た「豆→粉」の変化とは言えず、「粉状」が「小豆」の一形態を表しており、この両者も対等な名詞ではない。この「粉状」も変化の結果現れるものではあるが、その意味するものは「小豆」の様態であり、様態修飾である。粉状になっても元の物質が小豆であることには変わらない。A級補語である「小豆」に結果補語「粉状」がついた記述である。

(60) 反物を紫に染める。

(61) 服をどろどろに汚す。

(62) 柱を垂直に立てる。

(63) 写真をきれいに撮る。

このようにヲ→ニ原則から拡張したニ格は副詞的な振る舞いを見せる。現に (61) の「どろどろに」は副詞であり、続く (62) (63) の「垂直に」「きれいに」は形容動詞「垂直だ」「きれいだ」の連用形である。これらはもはや語の一部となり、格助詞ではなくなってしまっているが、用法としては「名詞＋格助詞ニ」と共通している。本論での論証の順序から、「拡張」という表現を用いたが、この副詞的なニの用法が逆にヲ→ニ原則へと収斂していったと考えられる。

2.3. 【対象】ヲ【結果】ニスル

(64) 木村を秘書にする。

(65) この問題を終わりにする。

(64) (65) のヲ格・ニ格も対等な名詞ではないが、それぞれ「木村をする」「この問題をする」では文が完結せず、これらのニ格は「する」の必須格となっている。【対象】ヲ【結果】ニスルという形態をとっているが、それぞれ「木村→秘書」「問題→終わり」という変化が物質的におこった

わけではない。しかし、ここで起こった作用が開始される前には「木村」がおり、「問題」が存在したわけで、ヲ→ニ原則を逸脱するものではない。ヲ→ニ原則は対象の物質的变化のみならず、広く動作作用がおこなわれるさまざまなものを飲み込む。

2.4. 場所的概念としての「→ニ」から行為の【相手】へ

(66) ノートをかばんに入れる。

(67) 教科書を机の上に出す。

(68) 自動車を玄関前に停める。

(69) 活動の場を海外に移す。

(66) 以下は対象の場所空間的な変化であるが、やはりニ格は変化の帰着点を表しており、「→ニ」に通じる。(66)～(68) では【モノ】ヲ【場所】ニの移動であるが、(69) は【場所】ヲ【場所】ニである。しかし、(69) の「活動の場」と「海外」も対等な関係にはなく、「活動の場」はA級補語となっている。帰着点ニをとる場合、ヲ格は変化に対してA級補語でなければならない。

(70) 子供に服を着せる。

(71) 友人にみやげを渡す。

(72) 母に手紙を書く。

(73) 恋人に電話をかける。

(70) (71) は【モノ】ヲ【ヒト】ニの移動である。筆者はきわめて自然な感覚として（つまり特に何も意図せずに）この語順で記したが、帰着点が【ヒト】である場合、ニ格が前に出るほうが自然な感じを受ける。この場合も「服」「みやげ」は変化に対してA級補語となっており、移動のおこなわれる帰着点に「子供」「友人」が存在する。さらに (72) では【モノ】の移動ではなく、「手紙を書く」という行為のベクトルの向かう先としてニ格が現れる。一般に「相手のニ格」と呼ばれるものである。「手紙」はゆくゆくは母の元へ届けられるかもしれないが、「送る」などとは異なり、「書く」という作用が「手紙」の物理的な移動を表すものではない。(73) の「電話」はそもそも移動しない。

2.5. カラ格と置き換え可能な二格

- (74) *子供に服を脱がす。
- (75) *友人にみやげを受け取る。
- (76) 母に手紙をもらう。
- (77) 岡田先生に日本語を習う。

二格に【ヒト】が現れる場合、語順がヲ格の前面に出るなどの特殊性が認められるが、「帰着点の二格」と「相手の二格」の間には、性格の違いが残る。対象となる【モノ】、あるいは【行為】が、動作主に向かってくるような意味内容を持つ文の場合、相手として二格がとれる動詞ととれない動詞があるのである。

(74)～(77)の二格はすべてカラ格と置き換えた場合に正文となるが、(74)(75)は二格を採用した場合に非文となる。このように、二格がとれない「脱がす」や「受け取る」などは動作の相手を表すことができない動詞であり、二格がとれる「もらう」や「習う」などは相手を表すことができる動詞ということができる。「相手の二格」になるともはやヲ→ニ原則から逸脱してもかまわないということになる。受動態の能動主を表す二格もこのタイプに近い。次の例は自動詞文であるが、相手の二格がベクトル性を表さなくなっているために理解が難しくなる例である。

- (78) ピッチャーが岡から谷に代わる。
- (79) ピッチャー、岡に代わりまして谷。ピッチャー谷。
- (80) ピッチャーが谷に代わる。 (→谷)
- (81) 岡が谷に代わる。
(→岡? →谷? 両義性)
- (82) 80年代に入ると、CDがレコードに取って代わった。(レコード→CD)

野球場で(78)の事実があったとする。そのとき場内アナウンスは(79)のようにアナウンスすることが多いようである。この両者の「代わる」が表す語義は少し異なっている。(78)はピッチャーという職務に注目した用法で、単純にそれを担当するものが「岡→谷」に変化したことを表す文である。それに対して(79)は交代した「谷」に着

目した表現で、「谷」が「代わって投げる(その職務を遂行する)」というコトまで表現しようとするものである。しかし、二格だけでこの変化の方向を決定することは難しい。(80)は(78)からカラ格の岡を省いた文であるが、「ピッチャー」がガ格で登場する限りは二格の「谷」は結果補語である。しかし、ヒトがガ格となる(81)になると、「代わる」が単純な変化「岡→谷」なのか、交代任務遂行「谷→岡が投げる」なのか文脈の助けがなければ読み取れない。なお、「取って代わる」の場合は(79)の用法でしか用いられない(例82)。

2.6. 結果的に二格へ持っていこうとする認識

- (83) 子供を7時に起こす。
- (84) 長さをサンプルにそろえる。
- (85) 声色を女性に似せる。
- (86) 朝食用におにぎりを買う。

(83)は時間のニ、(84)(85)は基準のニ、(86)は用途のニである。ヲ格で表された「子供」「長さ」「声色」「おにぎり」はすべてA級補語であり、二格で表される名詞句は作用の実現段階で求められるものとみることができる。(83)は「子供」を結果的に「7時」に起きる状態にすることであり、(84)はさまざまな「長さ」のものを結果的に「サンプル」と同じ長さにすること、(86)は「おにぎり」を結果的に朝食用とすることを目的に「買う」のである。そこに共通しているのは作用の手元にあるヲ格を結果的に二格へ持っていこうとする認識である。二格は本来「～ニ＋あり」のかたちで存在の場所を表す助詞であって、実際にはさまざまな用法がある。本稿ではそのすべてを検証することはしないが、少なくともヲ格との関係、つまり他動詞文で現れる二格を見つめるならば、相手の二格以外はヲ→ニ原則を著しく逸脱するものはないように思われる。言い換えれば、ヲ格は手元にあるもの、二格は遠い先にあるものという認識かもしれない。話者から見れば、動作主に当たるものとその【相手】では、動作主のほうをより近く見ていると考えられる。そう考えれば動作主のおこなう動作の直接対象である【モノ・コト】に対して「手元のヲ格」、その動作の【相手】に対

して「遠くのニ格」を採用することも理解できるかもしれない。

3. 自動詞文と [ヲ→]

3.1. [ヲ→] に自立性はあるか？

- (87) おたまじゃくしがカエルになる。
- (88) ノートがかばんに入る。
- (89) 同僚の女性に惚れる。
- (90) 子供が7時に起きる。
- (91) 声が父親に似ている。
- (92) このフードは雨よけになる。

ヲ→ニ原則から自立可能な [→ニ] を表すニ格は自動詞文にも現れる。自動詞文は1.1.でみたように、動作主自身に変化することを表すので、変化の結果に対してニ格をとる。また、前項でみたような帰着点や相手、時間や基準などもそのまま自動詞文で現れる (例87~92)。

- (93) *銀行で円をカネに換える。
(具象ヲ+抽象ニ)
- (94) *銀行で円をカネを換える。
(具象ヲ+抽象ヲ)
- (95) カネが円からドルに換わる。
(*円を) [¥→\$]
- (96) カネがドルに換わる。 [→\$]
- (97) *カネが円を換わる。 [¥→]

しかし、ヲ→ニ原則のもう一方、[ヲ→] のほうは [→ニ] のようには自由に振舞えず、他動的動作としっかりと結びついている。(93) のように、ヲ格に「円」が現れれば、その文は具象的動作にならざるを得ず、ニ格の側に抽象的なA級補語である「カネ」が現れることはない。(94) のような具象的補語と抽象的補語が重なる二重ヲ格も許されない。つまり、具象的補語としての [ヲ→] は自立して副詞的要素とはなりえず、元来ヲ格を必須補語としない自動詞との結びつきも拒絶する。(95)~(97) に見られるとおり、自動詞文では変化の前の「円」はカラ格で表され、ヲ格では出現しない。

しかし、例外として自動詞と結びつくヲ格が次の例である。

3.2. 自動詞と結びつくヲ格

A, 移動格

- (98) 部屋を出る。(移動の起点)
- (99) 交差点を渡る。(横断)
- (100) あの山を越える。(通過点)
- (101) 空を飛ぶ。(移動空間)
- (102) 雨のなかを歩く。(動作時の状況)

B, ヒト性主語を持つ自動詞とヲ格

- (103) これでわたしの挨拶を終わります。
- (104) 太郎は大きく口を開いて寝ている。
- (105) 答えを間違ってしまった。
- (106) 翁が湖に釣り糸を垂れている。

C, 「向く」と結びつくヲ格

- (107) 授業中ひとりの生徒がうしろを向いている。
- (108) このボタンを押すと、機械がこちらを向く。

D, 他動詞化した自動詞

- (109) 当局を笑う。
- (110) 学校を休む。
- (111) 日本語を勉強する。
- (112) 機械を触らないでください。

ここに挙げたA~Dのなかで、Dについては意味的に他動詞に転化していて、ひとつのグループとしては類型化できない。森田良行 (2002)⁴ は、「夜があける」「窓をあける」の組も「自他両用和語動詞」のなかに含めている。現代日本語ではそれぞれ「あかす」「あく」という対応する自他動詞を持っているが、確かに歴史的に見れば同根の動詞であったかもしれない。したがって、D, については、実際には他者に作用する他動詞として用いられている点、また、ひとつのタイプに類型化することが難しい点から、本論では深くふれない。ここでは自動詞と結びつくヲ格としてA~Cの3つのタイプを紹介する。

⁴ 森田良行 (2002) 『日本語文法の発想』 ひつじ書房

格をとるが、移動元としてのヲ格をとることができない。これは1.4.で見た「作る」とよく似ていて、[ϕ →電車]の移動を表す動詞である。一方(124)の「降りる」は[電車→ ϕ]の移動であり、(125)のように移動先を併記することが不可能な動詞である。これは「問題を解く」や「穴をふさぐ」に通ずる。「おりる」には(126)のような表現もあり、この場合の「階段ヲ」は【空間(状況)】のヲ格、つまり他動詞文で見たA級補語によく似た抽象補語であり、「おりる」の抽象動詞的用法に移動先としての「1階ニ」がくっついているのである。他動詞文が「カネ(A級補語)をドル(結果補語)に換える」と言い得たのと同様、「階段を下りる」という抽象動詞的用法に具体的な帰着点である「1階ニ」が付くことは可能なのである。

3.4. ヒト性主語を持つ自動詞とヲ格

B, については須賀一好(1981)¹の研究に詳しいが、須賀が「ヒト性主語をもつ自動詞とヲ格」と呼んでいるものである。これは「ヒト性」主語を持った自動詞が、あたかも他動詞であるかのようにふるまうもので、これをD, と同じく自動詞の他動詞化だと考える研究者も多い。

- (127) ドアが 開く。
 (128) わたしは ドアを 開ける。
 (129) 来賓が 門を 通る。
 (130) 守衛が 来賓を 門を 通す。
 (131) わたしの挨拶が 終わる。
 (132) (わたしが) わたしの挨拶を 終わる。

(127)(128)は対応する動詞の自他のパターンである。奥津(1967)は(129)(130)の双方において「門ヲ」が出現することをもって移動格の特殊性を立証した。その点、「ヒト性主語をもつ自動詞のヲ格」は対応する動詞の自他のパターンが成り立つことから、一見(131)(132)の関係が自・他の関係にあるように見える。

- (133) 太郎は大きく口を開いて寝ている。
 (134) *太郎は大きく次郎の口を開いて寝ている。
 (135) *コーラがふたを開いている。

しかし、須賀は(133)のような「を」格がみられるのは、動作主が「人性」を有する場合に限られ、しかも動作主自身に変化の影響が及ぶ行為に限られるため、対応する他動詞を用いた用法とは区別し、あくまでも自動詞の用法として位置づけている。

- (136) 校長が 学校を かわる。
 (「を+自動詞」の用法)
 (137) 校長が 学校を かえる。
 (「を+他動詞」の用法)

(136)では校長が別の学校へ赴任するとししか理解しえないが、(137)ではそれ以外に校長が現在いる学校を変革させるという意味にも理解しうる。つまり(136)において変化するのは学校そのものではなく、むしろ校長自身であるという捉え方である。したがって、(136)を他動詞の用法とするのは難しく、(136)と(137)は異なる用法による、異なる状況を指すもので、(136)は依然として自動詞の用法であるというのが須賀の主張である。しかしながら、須賀は同時にこれらの用法を、量的には例外とすべきであろうとも述べている。

- (138) 岡がピッチャーを谷に代わる。
 (139) わたしがピッチャーを代わろう。

2.5.で考察した(81)もこのタイプのヲ格をとることができる(例138)。ただ、ヲ格を伴っても、その変化が[岡→谷]なのか[谷→岡]なのか、依然として判断が難しい。(139)のようにニ格がなく、「代わろう」という意志が表された場合は[→わたし]であることがはっきりする。

3.5. 「向く」と結びつくヲ格の意識性

- (140) 扇風機を 右に 向ける。
 (141) 扇風機が 右に 向く。
 (142) 名前を呼ばれて、太郎は先生のほうを向いた。

C, 自動詞「向く」はその方向にニ格をとって他動詞「向ける」と対応している(例140, 141)が、

「右ヲ向く」という表現も一般的に用いられる。これについては小池清治・田邊知成(2002)⁸で考察をおこなったが、「向く」を動作主の行為として認識した場合に「ヲ向く」が採用され、動作主の変化を客観的に捉えた場合に「ニ向く」が採用される。(141)のように無情物(モノ)が主語に立つ場合はニ格が採用されやすいが、(142)のように有情物(ヒト)が主語に立つ場合はヲ格が採用されやすい。

(143) 包丁の先がこちらを向いていて怖い。

逆に、(143)のように無情物(モノ)がニ格を採用した場合、その表現はどこか擬人的なものとなる。

(144) 彼だけうしろを向いて歩いている。

(145) 彼だけうしろに向いて歩いている。

(144)では「彼」が「うしろ」の友人とお喋りしながら、あるいはよそ見をしながら、ほかの皆と同じ順方向へ向いて歩いていると解釈できる。しかし、(145)ではその解釈が成り立たない。明らかにほかの皆とは逆方向に歩いているとしか解釈できない。ヲ格は動作主の意識的な(主観的な)「向く方向」を示し、ニ格は客観的な、物体としての「彼(body)」の「向く方向」を示している。したがって「彼」という有情物(ヒト)が主観的に持つ向きというものと客観的な「彼」という物体の向きが異なる場合、ヲ格とニ格の表す意味のあいだには矛盾が生ずる。つまり、「向く」という動詞が持つ作用には、動作主の意志性を有するものと、そうでないものがあり、両者を峻別するためにヲ格とニ格が使い分けられているということである。ただ、「向く」がヲ格としてとることが許されるのは、方向を表す補語のみで、これをもって「向く」が他動詞化しているとは言えない。あくまでも自動詞である「向く」の用法なのである。

格助詞ヲが自動詞「向く」と結びつくのは、行為の持つ主観性・意識性といった概念に大いに関係しているのである。

4. 手元にあるヲ格を結果的にニ格へ持っていこうとする認識

4.1. 森田(2002)の考える「名詞+ヲ」の意味

3で紹介した「自動詞と結びつくヲ格」A～C, 3者に共通しているのは動作主のヒト性と強く関わっている点である。すでにC,「向く」と結びつくヲ格で見たように、ヒト性とはすなわち主観性であり、意識性である。格助詞ヲ自体がこうした主観・行為・意識・意志といったキーワードと密接に結びついていると考えられる。

森田良行(2002)はヲ格全般について次のような分析をおこなっているが、ア～オ、すべてに「～を示す意識」という言葉が用いられている点が興味を引く。

- 本来「を」は目的格を表す助詞といった論理的なものではなく、「あなにやし、えをとこを(乎)」(古事記 上)とか、「八重垣造る、その八重垣を」(同)の例のような間投助詞であったといわれる。要するに直前の名詞について感情的な格を表現しているといえる。「いかで月を見ずてはあらむ。」(竹取物語)などに端的に現れているのだが、見る対象意識よりは、「月」に込められる感情の現れと解していいだろう。極めて自己中心の感性寄りの認識把握といっていい。それが後に、文脈から、
- ア, 他動性の動作・作用の目的・目標を示す意識
 - イ, 他動性を帯びた自動詞の目的・目標を示す意識
 - ウ, 希望の対象・使役の対象を示す意識
 - エ, 作用・行為の志向に伴う結果を示す意識
 - オ, 地理的・時間的移動現象や行為の成立する過程を示す意識
- 等へと発展していったものと見られる。

もともと終助詞や間投助詞であったヲが統語を担う格助詞としての機能を持つようになるにつれて他動的動作の対象を表すようになり、やがては自動詞の移動格までも表すよう、意味を拡大させたという分析である。「自己中心の感性寄りの認識把握」というところが興味深い。

筆者は小池・田邊(2003)で、「向く」と結び

⁸ 小池清治・田邊知成(2002)「自動詞「向く」と「を格」の結びつき」『外国文学』第51号

つくヲ格を「意識の向きを表現するために採用されたもの」とした上で、次のような仮説を示した。それは、「ヲ+向く」は他動詞的な「意識の向き」を表現するために採用されたものであるが、「ヲ+向く」が他動詞の垂流なのではなく、むしろ他動詞のほうが「を+向く」の延長線上にあるのではないか。つまり、「ヲ+向く」に見られるような「意識の向き」というものが他動詞にも存在し、格助詞ヲは本来的にそのような「意識の向き」を表すマークであるという仮説である。

他動詞というものは「他の何者かに何らかの処置を施そう」という意図を持っているものであり、ヲ格は本来このような意図の向けられる対象をマークするものである。つまり、ヲ格は他動詞においても「意識（意図）の向き」を示していると言えるのである。引用文のなかで森田は「要するに直前の名詞について感情的な格を表現している」と述べているが、筆者の仮説は森田の分析に近い。

森田はア〜オへとヲ格が発展していったと述べた後、ヲ格の用法の分類を試みている。

①精神作用・感情の志向・原因

……合格を喜ぶ／親の死を悲しむ／成功を願う／故郷を思う

②内容……将来を話し合う／結婚を約束する／答えを教える

③理解の対象

……本を読む／相手の目を見る／ラジオを聞く

④動作・作用の対象

……虫を殺す／木を植える／中身を調べる／手を洗う／蓋を開ける／豆を挽く／薪を燃やす

⑤行為の相手

……彼を誘う／父を口説く／人を愛する／人を待つ

⑥付加・加工行為

……砂を混ぜる／水を加える／ペンキを塗る／砂糖をまぶす

⑦行為を向ける場所・箇所

……傷口を覆う／的を射る／顔を隠す／扉を塗る

⑧入れ物…グラスを空ける／家を空ける／袋を満たす

⑨行為実現の道具

……(a)臼を碾く／弓を射る／鋸を挽く
(b)矢を射る／釘を打つ／鍵をかける

⑩消費……油を食うエンジン／年を取る／齢を重ねる

⑪目標……1位を争う／優勝を狙う

⑫結果……家を建てる／有終の美を飾る／仏像を彫る／火を燃やす／粉を碾く／壁を塗る／湯を沸かす／茶碗を焼く

⑬作用の結果（非意志性）

……赤みを帯びる／苦痛を伴う

⑭基準の対象

……10日間の安静を要する／10秒を切る
／5割を割る／100人を上回る／10万人を越える

⑮動作の行われる時間・距離

……1年間を送る／2時間を過ごす／海外での3年間を暮らす／4分を経過する／100メートルを走る／現代を生きる

⑯移動動作の行われるところ

ア、経路……道を歩く／空を飛ぶ
イ、経由点…門に入る／丘を越える／町を抜ける

ウ、起点……空港を発つ／家を出る／車を降りる

エ、方向……後を振り向く／北を向く

オ、移動の位置

……トップを走る／しんがりに行く
(ポジション)

森田自身も述べているが、以上はあくまでも森田の分類例であり、研究者によってさまざまな分類が可能となろう。北原保雄（2002）は、『明鏡国語辞典』⁹のなかで、他動詞のヲ格14、自動詞の移動格7、状況補語としてのヲ格1の計22種に分類している。両者の分類に共通していえることは、このタイプがあまりにも多いということである。結局はヲ格の分類というより、動詞の語義の類型といった感じがする。要するに、少なくとも他動

⁹ 北原保雄編（2002）『明鏡国語辞典』大修館書店

詞文においては、動詞の表す意味内容によって、その動作に参加する他者をいかようにもヲ格として取り込めるのである。

4.2. 他動的動作とは何か？

(146) わたしは太郎を殴った。

(147) わたしは太郎のほうを向いた。

(146) は、動作主が対象に対して物理的な作用を加えるという点で、言わば典型的な他動詞文であるが、この場合でも (147) の「ヲ＋向く」と同様、動作主の「意識（意図）の向き」は「太郎」に向けられている。このことから考えて、他動的動作とは以下のような過程をたどる作業であると言える。

他動的動作とは、

- ①対象に射程方向（意識の向き）を合わせ、
- ②それを支配・拘束し、何らかの作用（処置）を加える作業である。

そしてその場合、動作主の「意識の向き」は対象に対する【意図】として、その対象内部に組み込まれている。他動詞文とは、上記の②をもってそれが定義づけられるのであるから、他動詞文においては、ヲ格が「ヲ＋向く」のような「方向格」であるという①の要素は顕在化してこない。そして、「向く」という動詞が表す作用は①そのものであり、他動詞の条件である②を満たしていない、他動詞になりきれないでいる動詞なのである。他動詞文に必須格として現れるヲ格は、動作主にとって他者をその作用に参加させようという意図の向きを表す格だと言える。

4.3. 抽象的でおおざっぱな性格を持つヲ格から ヲ→ニ原則へ

(148) 臼を挽く。

(149) 粉を挽く。

(150) 豆を挽く。

「挽く」という動詞は「臼のような道具を扱う」という語義を持っているので、その限りにおいて動作の意図は「臼」のような道具に向けられる。したがって (148) のように「臼」にたいしてヲ格をとることができる。また、そこから転じて「それら道具を用いて食物を細かくする」という語義を持つにいたったために、道具の使用目的である (149) 「粉」に意識が向けられる。ここまでは1.7.で述べた抽象動詞の用法ということになる。そして同時に、具象的な記述として、その元になる食物、(150) 「豆」にも意識が向けられるようになる。要するに、他動的動作の場合、参与者として望む他者をなんでもヲ格として取り込んでしまうのである。ヲ格というのはその意味で非常に抽象的でおおざっぱな性格を持っている。「テレビを見る」という行為であっても、われわれはテレビ受像機を見ているわけではなく、「テレビ」という名詞句は非常に抽象的な対象でしかない。われわれが実際に見ているのは画面の部分であり、その画面に映る像であり、像に現れる人であり、景色であり、それらの像を知識として咀嚼しているのであり、内容としての番組を見ているのである。これらの名詞句「テレビ、画面、像、内容、番組…」はさまざまなレベルの名詞句であるが、そのすべてが動作主にとって「見る」という作用に対する「参加する他者」であり、すべてがヲ格として「見る」と結びつく。これらさまざまな名詞句がヲ格として共通しているのは動作主にとっての「他者性」であり、動作主の「見る」という「意識の向き」である。

(151) カネを換える。

(152) カネをドルに換える。

(153) 円をドルに換える。

日本語が、より論理的で正確な表現を求めるうちに、次第に格助詞は論理的な統語機能を強く求められるようになる。(151) のような単純で抽象的な用法から、(152) のように与える変化作用の結末を表す補語を加えることが可能となり、その結果補語はニ格で表された。さらに、(153) のような変化作用のはじめから終わりまでを正確に表す用法としての具象作用、ヲ→ニ原則が確立してき

たものと考えられる。

(154) 絵を描く。

(155) 見たままの光景を絵に描いてみる。

(154) (155) からも見えてくるように、ヲ→ニ原則を省略したおおざっぱな表現として「絵ヲを描く」が生まれたのではなく、「絵ヲ描く」を厳密に、論理的に表現するために「(イメージを) 絵ニ描く」の用法が生まれたと考えるほうが自然である。

4.4. ヲ格の優位性

(156) カネに換える。

(157) 絵に描く。

(156) (157) のような文が発話された場合、聞き手はこれを何か必要な情報が省略されているのだと理解する。話者が何の意図もなく、単に抽象的な補語として「カネに」、「絵ニ」と言ったのであれば、この文は非文となる。聞き手はこの「換える」「描く」という作用の参与者情報の欠落を覚えるのであり、「カネ」「絵」は「カネ」以外「絵」以外のほかの何者かの変化の結果に過ぎないのであらうと考える。話し手の口からニ格が発話された場合、聞き手はそれが変化の先に存在するキーワードだと無意識に認識する。ニ格自体に何らかの変化作用が加えられたとは認識せずに、ほかのものが変化作用を受けた結果としてそのニ格があるとしか認識できないのである。したがってA級補語がニ格で現れることはない。ここに他動詞文におけるヲ格の優位性が見受けられる。(152) の「カネをドルに換える」では「カネを」というA級補語によってすでに「換える」という文は完結している。「ドルに」というニ格は修飾語として副詞的な補助的役割を担っているにすぎない。つまり、すでに言い古されていることではあるが、他動詞文においてヲ格は欠くことができないのであり、他動詞文を他動詞文たらしめているのがヲ格なのである。ヲ格が図らずとも他動詞を象徴するマークとなった結果、ヲ格は、浮遊可能なニ格のように副詞句として出現することが許

されず、また、自動詞文との結びつきを拒絶しなければならないのである。

(158) 太郎は花子に惚れる。

(159) 娘が母に甘える。

(160) 我が家の愛犬は不審者に吠える。

それに対して、(158)～(160) では、聞き手は参与者情報の欠落を覚えない。(158) は何者かの心情変化の結果が「花子」に向けられているとしても、その「何者か」が動作主の太郎であることが聞き手にはっきりとわかるからである。(158)～(160) はしたがってヲ格を必要としない。つまり、他動詞とは呼べない。

4.5. ヲ格はなぜ自動詞文との結びつきを拒絶しなければならないのか？

(161) 電気が 消えた。

(162) 母が 電気を 消した。

ヲ格は自動詞文との結びつきを拒絶しなければならない。それはヲ格が、対応する自動詞文でガ格が担っているものを表す格であるからである(例161, 162)。そしてその自動詞文でガ格が担っているものとはすなわち「変化の主体」である。動詞文が何らかの変化を表すものである以上、変化の主体を欠くことはできない。他動詞文とは動作主が「他者」に対して意識の向きを定め、それに対する変化の与え手として振舞おうとするものであるから、他動詞文ではたとえそれが抽象的なものであっても、実際に変化が現れる具象的なものであっても、変化の主体、ヲ格を欠いた文はありえないのである。逆に自動詞文は、たとえ抽象的なものであっても、具象的なものであっても、変化の主体が動作主なのであるから、変化の主体を動作主以外として表すヲ格を拒絶する必要があるのである。

しかし、その一方で動作主の意識の向きを表すというおおざっぱな一面を併せ持つヲ格は、その性格ゆえに、本来はヲ格を拒絶すべき自動詞文に紛れ込むことがある。3.2.で紹介した「自動詞と結びつくヲ格」のタイプB、「ハナを垂れる」や

タイプC, 「こちらを向く」のように主語にヒト性が入り込みやすいもの、さらにはタイプD, のように他動詞化して他者の変化を表すにいったものなどである。

Aタイプの移動動詞に関しては、すでに「紛れ込む」といったレベルのものではなく、システムティックに他動詞のヲ→ニ原則が息づいてしまっている。それは移動動詞が表す動作主自身の変化とは、動作主の位置的情報の変化であり、その位置的情報を表す名詞句を別途とらなければならないという必然から採用されたものと考えられる。そして、その移動格のヲ格の用法は抽象補語、具象補語含めて他動詞のヲ→ニ原則とまったく同じ性格を持っているところに注目したい。移動格のヲ格も他動詞のヲ格と同様、非常に抽象的でおおざっぱな性格を持っており、その上で移動の起点という、具象的な移動元を表す機能も持っているという点である (3.3.)。

4.6. 森田 (2002) の言う「～ニ～ヲ動詞」と「ヲ～ニ動詞」

前項で、「話し手の口からニ格が発話された場合、聞き手はそれが変化の先に存在するキーワードだと無意識に認識する」と述べたが、ヲ格とニ格の関係においてしばしば両者が交換可能となる例が存在する。森田 (2002) は次のような例を挙げている。

- (163) 太郎に嫁を探す。
- (164) 太郎に嫁を選ぶ。
- (165) 花子を嫁に選ぶ。
- (166) 花子を嫁に決める。

以上の (163) ～ (166) について、森田はこう説明する。

(163) まず、人間関係の面で該当しそうな不特定対象を探し、(164) 次にそれらの中から、いずれが適当か該当対象を選択する。(165) そして、特定の一対象を選定し、(166) それに決定する。これら一連の行為は、“探索→選択→選定→決定”という (163) → (166) の流れで表され、文型面で「～ニ～ヲ動詞」(163) (164)、

「ヲ～ニ動詞」(165) (166) 形式をとり、同じ「選ぶ」が2種の文型に分かれる。前者は“選択”、後者は“選定”という文型に支配された個別的意味を呈し、「探す→選ぶ (1)」「選ぶ (2) → 決める」という行為の順序性ととも、三つの動詞の語彙面での意味的つながりも、表現文型との関係で把握されるのである。

一連の行為が、「～ニ～ヲ動詞」から「ヲ～ニ動詞」へとつながるのだという指摘はたいへん面白いが、ここまで述べてきたヲ→ニ原則で (164) (165) の2つの「選ぶ」を分析することも可能である。

- (167) 太郎に嫁を選ぶ。 ♀ → [嫁→太郎]
- (168) 花子を嫁に選ぶ。 [花子→嫁] → ♂

(167) は森田の言うように“選択”を表しており、嫁となる[♀]は文には現れないが、“選択”の場合、A級補語として「嫁ヲ」をとり、相手の二格として「太郎」をとっている。「相手のニ格」は語順として前面に出ることが多い。一方、(168) は“選定”を表しているが、A級補語「花子」を「選ぶ」という作用に対して、結果補語として「嫁ニ」がくっついているタイプである。認識としては、(167) では動作主の意識は「選ぶ」対象としてまだ決めかねている「嫁」を意識しており、その“選択”の先に結婚させる相手である「太郎」を見ている。(168) では動作主の意識は「花子」に向けられている。もうほかの女性のことには関心がなく、その“選定”の末に「嫁」という地位 (といってよいだろう) を見ているのである。

- (169) 母に宇都宮を案内する。
- (170) 母を宇都宮に案内する。

(169) (170) も基本的には今見た (167) (168) と同じである。(169) は「相手ニ対象ヲ」、(170) は「対象ヲ場所ニ」となり、他動詞「案内する」の直接的な対象が異なると同時に表す意味内容も少し異なる。(169) は「案内」の対象が「宇都宮」という町であり、それを相手に対していろいろと

紹介してあげることの意味している。「宇都宮」を手元に置き、その作用の先に相手である「母」が存在する。一方、(170)のほうは、とにもかくにも対象である「母」を「宇都宮」という場所に連れてきさえすれば目的は達成されるのである。「母」を手元に置き、その移動の先に「宇都宮」を見るという認識である。

5. 結論：意図ヲ向けたその先ニ

どの言語の話者でも、文頭から文末にかけて、徐々に伝達内容を限定していきながら、文を構築し、発話しているのであり、聞き手も、その順序で意味を限定しながら理解へといたる。日本語は名詞の後に後置詞を置き、最終的に述語を並べ、ムードを添える「S+O+V」型の言語構造を持っている。したがって、日本語話者の言語理解もこの順序でおこなわれる。話し手が「太郎を…」と発話した時点で、聞き手の側は、その発話の動作主が（日本語の場合特に断りがない場合は話し手が動作主となるが）「太郎」に対してどのような関わりを持っているのか、瞬時に推測を立てているはずである。当然、「太郎に…」と発話されれば「太郎を」とは異なる何かを感じるはずである。また、話し言葉というものはときに言いよどみ、ときに言いまちがいを起こしてしまうものである。「熟慮の上、今回自衛隊を派遣することに…」といて言いよどみ、あるいは何らかの修飾節が途中で入り込んだりして、結果的に「わたしは決心しました。」で文を終えてしまうことなど、誰しも経験することである。最初は「～ニ決めました」とでも言おうと思っていたのが、最終的にはヲと結びつくべき「決心する」でまとめてしまったという例であるが、話し手は「派遣することに…」と発話した時点で、何らかの統語的限定を文に与えているはずである。また、聞き手も「派遣することに…」と聞いた時点でその後に来るであろう述語を限定しているはずなのである。では、そのときに日本語話者が意識するものとはいったい何なのだろうか。それが筆者の疑問点であった。本稿ではヲ格とニ格について、日本語話者が感じているものは何なのかを探ってきた。動作主の後にヲ格が発話されたとき、話し手は動作主がその変化の与え手であると認識している。そしてその

ヲ格をこれから与える述語によって変化する主体だと認識しているはずである。その変化の主体は抽象的な存在であるかもしれない。変化はその主体の内部で起きるものなのかもしれない。そこには、動作主が変化の与え手として、それを手元に置こうとし、何らかの処置を施そうという意図を持っているということが推測される。ヲ格からはそのような処置性が感じられる。対して、ニ格からはそれが変化の先にあるものというイメージを受ける。そしてそのニ格は述語動詞の与える作用によって直接に変化する主体ではないということのをわれわれは感じ取っている。本論では、それが決して漠然としたイメージではないということを検証してきた。4.1.で、北原保雄（2002）が『明鏡国語辞典』のなかでヲ格の用法を計22種に分類していると述べたが、同書で北原はニ格の用法をなんと28種に分類している。述語との結びつき、また名詞句との結びつきを見れば、ヲ格もニ格もさまざまな用途で用いられている。しかし、日本語の統語構造のなかには明らかにヲ→ニ原則が存在し、一部の例外は認めながらも、その原則の中で文が正しく理解できるようになっている。今回は検証できなかったが、ガ格については話者の主観を排した客観性がうかがえる。話者の主観から突き放したようなイメージを受ける。格助詞ガ・ヲ・ニは日本語の統語構造の中核を担うものである。この3者の役割をより正しく認識することができれば非母語話者の日本語習得にも大きな助けとなるのではないだろうか。

参考文献

- 本居春庭（1828）『詞通路』
 仁田義雄（2002）『辞書には書かれていないことばの話』岩波書店
 仁田義雄編（1993）『日本語の格をめぐる』くろしお出版
 杉本武（1986）「格助詞——「が」「を」「に」と文法関係」
 『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社
 森田良行（2002）『日本語文法の発想』ひつじ書房
 金谷武洋（2002）『日本語に主語はいらない』講談社選書メチエ

寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味』
くろしお出版

庵功雄ほか (2001) §12. 自動詞と他動詞
『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク

奥津敬一郎 (1967) 「自動化・他動化および両極化転形——自・他動詞の対応——」

『動詞の自他』日本語研究資料集〔第1期第8巻〕ひつじ書房

奥田靖雄 (1983 a) 「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」言語学研究会編

『日本語文法・連語論 (資料編)』むぎ書房

奥田靖雄 (1983 b) 「を格のかたちをとる名詞と動詞とのくみあわせ」言語学研究会編

『日本語文法・連語論 (資料編)』むぎ書房

金田一春彦監修 (1995) 『日本語大辞典第二版』
講談社

久野すすむ (1973) 『日本文法研究』大修館書店

須賀一好 (1981) 「自他違い——自動詞と目的語、そして自他の分類——」

『動詞の自他』日本語研究資料集〔第1期第8巻〕ひつじ書房

山田孝雄 (1908) 『日本文法論』宝文館

北原保雄編 (2002) 「明鏡国語辞典」大修館書店

小池清治ほか編 (2002) 『日本語表現・文型事典』
朝倉書店

小池清治・田邊知成 (2002) 「自動詞「向く」と「を格」の結びつき」

『外国文学』第51号

[追記]

本論文は、小池と田邊君の共著の形をとってはいるが、実際は田邊君の修士論文に若干手を加えたもので、実質的執筆者は田邊君であることをおことわりいたします。

What case-marking particle ヲ and ニ expresses

The "ヲ→ニ principle" found out in "ヲ case type syntax"

Paper summary

In the Japanese which is an agglutinative language, the grammatical role of each phrase in the sentence is decided by the specific ending joining the phrase. A case-marking particle especially determines the grammatical role of the noun phrase about the back of a noun phrase. In these case-marking particles, ガ ヲ ニ is bearing the syntactic function of the fundamental sentence type "S+O+V" or "S+O+O+V."

However, there are many still unknown points about the case-marking particle which bears the syntactic function of this Japanese.

This research focuses on the ヲ case and ニ case which appear in "ヲ case type syntax" in these ガ ヲ ニ, and tends to explore the essence which case-marking particle ヲ and ニ express.

When the connection with a noun phrase or a predicate is seen from the semantic side, ヲ and ニ have various usages. *Yasuo Kitahara* (2002) classified the usage of a ヲ case into a total of 22 sorts, and he has classified the usage of a ニ case into a total of 28 sorts. However, the Japanese speaker usually feels something fixed, when a speaker speaks with "太郎ヲ--", and it is different from "太郎ニ--"

About this native speaker's feeling, the I formed the hypothesis the "ヲ→ニ principle" by 1.1. The action which a verb expresses is caught with one change, a ヲ case is taken to what is before the change, and a ニ case is taken to what appears after change. When the action expressed with a verb is expressed strictly, this "ヲ→ニ principle" is effective. However, there are not few verbs which take as a ヲ case what appears after change like "家を建てる" in Japanese ヲ case type syntax. Subsequent to Chapter 1.2., those usages were considered as abstract verb-usage. Consequently, in the case of abstract verb-usage, the result of an action was also employable as a ヲ case, but it became clear that it cannot coincide with the concrete complement which is before an action in that case.

The ニ case which bears the role of [→ニ] in the "ヲ→ニ principle" has high independence nature, and can be attached to various sentences as adverbial usage. On the other hand, [ヲ→] cannot be freely served like a ニ case, but refuses especially the connection with an intransitive verb. Chapter 3 considered the case where a ヲ case was connected with an intransitive verb. In the connection with a move verb, the "ヲ→ニ principle" is reproduced as it is like the transitive verb sentence, and it turned out also to the move verb that the view of the "abstract verb-usage" and the "concreteness verb-usage" which were considered in Chapter 1 is effective.

In Chapter 4, the consideration about a ヲ case at large was tried for analysis of *Morita* (2002) on the underlay. In the case of the transitive verb sentence, the ヲ case has the very abstract and rough character in which the "others" who can take part in the action will be taken in anything. The thing

common to them is direction of the consciousness to the "others" who is going to give change. The reason a ヲ case must refuse an intransitive verb sentence is that the ヲ case in a transitive verb sentence is a rank showing "the changing subject." which the ガ case is bearing in the corresponding intransitive verb sentence. There is no function to express the "changing subject" in a ニ case on the contrary.

If the connection with a predicate and the connection with a noun phrase are seen, the ヲ case and ニ case is also used for various uses. However, in a Japanese syntactic structure, the "ヲ→ニ principle" exists clearly. Even if there are some exceptions, a sentence can understand them correctly in the principle.

(2004年5月18日受理)